



TITLE:

京大広報 No. 210

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 210. 京大広報 1981, 210: 65-74

ISSUE DATE:

1981-02-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209476>

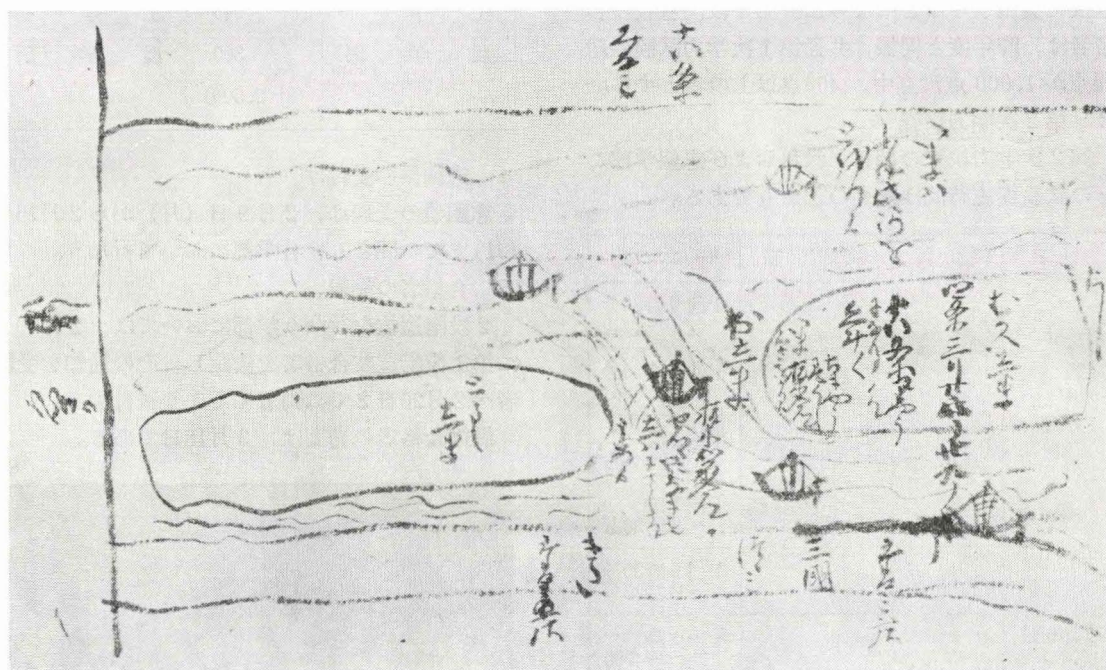
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 210

京都大学広報委員会



『教王護国寺文書』第382 摂津国垂水荘図

(現阪急宝塚線三国駅付近。15世紀頃の神崎川と帆船が描かれ、その航路変更が示されている。なお、本図の北(下方)に垂水荘が位置している。重要文化財。) — 関連記事本文73ページ —

目次

昭和56年度入学者選抜学力試験の実施計画……………66	日誌……………71
昭和55年度の停年退職教官……………66	＜随想＞
吉田寮熊野寮の現状と問題……………68	思い出すまま……………名誉教授 磯村 哲…72
結核胸部疾患研究所学術講演会……………71	＜紹介＞
防災研究所研究発表講演会……………71	文学部陳列館 その2 (国史学) ……73

＜大学の動き＞

定場所は次表のとおりである。

昭和56年度入学者選抜
学力試験の実施計画

昭和56年度入学試験については、例年どおり総長を委員長とする入学試験委員会を中心に、実施計画の検討が進められてきた。その概要は次のとおりである。

1 2段階選抜

今年度は、医学部が2段階選抜を取りやめたため、法学部、経済学部、理学部の3学部で2段階選抜を実施することになった。第1段階選抜の合格者は、昨年度と同様、共通第1次学力試験の総得点が1,000点満点中、400点以上の者とする。

2 第2次学力検査

第2次学力検査の期日・教科および志望学部ごとの試験実施時間は次表のとおりである。

月 日	教 科	学 部	時 間
3月4日 (水)	国 語	理	午前9時30分 ～11時
		文・教育・法 ・経済	午前9時30分 ～11時30分
	数 学	文・教育・法 ・経済	午後1時 ～3時
		理・医・薬・ 工・農	午後1時 ～3時30分
3月5日 (木)	外 国 語	全学部	午前9時30分 ～11時30分
	理 科	理	午後1時 ～3時
		医・薬・工・ 農	午後1時 ～3時30分

3 募集人員および入学試験場

各学部における募集人員および入学試験実施予

学 部	募集人員	試験場 (予定)
文 学 部	200 ^名	教 養 部
教 育 学 部	50	文 学 部
法 学 部	330	法学部・経済学部
経 済 学 部	200	教 養 部
理 学 部	281	関西文理学院
医 学 部	120	医 学 部
薬 学 部	80	薬 学 部
工 学 部	945	工 学 部
農 学 部	300	農 学 部
	(計 2,506)	

4 志願票の受付

志願票の受理は、2月9日(月)から2月16日(月)までの間とし、各学部において行なう。

5 合格者の発表

2段階選抜を行なう学部においては、2月20日に第1段階選抜合格者を決定し、その通知を受験者へ2月26日までに到着するよう送付する。

最終合格者の発表は、3月18日である。



志願票の受付 (2月9日工学部)

昭和55年度の停年退職教官

京都大学教員停年規程により、本年4月1日付けで本学を退職される教官は、次の方々(教授20名、助教授1名、助手3名)である。

部局・職名	氏 名	生年月日	出身地	講 座 等	研 究 分 野 等
文 学 部 教 授	湯 浅 幸 孫	大正 6. 4. 23	岡山県	哲 学 学 部 哲 学 史 第 六	中国近世、特に清朝の思想史の研究

部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地	講 座 等	研 究 分 野 等
文 学 部 教 授	今 津 晃	大正 6. 4. 24	静岡県	現 代 史 学	アメリカ史の研究
〃	島 田 虔 次	6. 8. 12	広島県	東 洋 史 学 第三	中国近世史の研究
経 済 学 部 教 授	木 原 正 雄	7. 1. 5	京都府	統 計 学	資本主義と社会主義の両体制における 計画化の理論と方法の比較研究
工 学 部 教 授	村 上 陽 太 郎	6. 4. 7	大阪府	金 属 材 料 学	金属材料学, 特に合金の微視的構造と 性質との繋がりにおよびその応用の研究
〃	市 川 克 彦	6. 9. 15	愛知県	石油化学加工学	有機金属化合物ならびに有機合成化学 に関する研究
〃	港 種 雄	6. 11. 15	香川県	地 質 鉱 床 学	鉱床の成因に関する研究, 岩石・鉱物 中の微量成分に関する研究
〃	井 伊 谷 鋼 一	6. 11. 22	静岡県	装置制御工学	粉体工学, 特に計測制御と集塵分級操 作およびプロセス制御
〃	森 山 徐 一 郎	6. 12. 19	京都府	非 鉄 冶 金 学	非鉄金属, 新金属製錬に関する研究
助 手	天 沼 倭	6. 9. 2	京都府	建 築 環 境 学	建築技術教育に関する調査, 統計
〃	安 井 久 三	6. 10. 25	京都府	建 築 材 料 学	構造材料の品質管理
農 学 部 教 授	上 村 恵 一	6. 4. 30	三重県	農 業 計 算 学	農業経営の経営計算および農業評価と 地域計画とに関する計量的研究
〃	中 島 稔	6. 11. 15	京都府	農 業 化 学	農業化学および天然物化学の研究
助 教 授	小 西 通 夫	6. 11. 24	京都府	応 用 植 物 学	環境生理学, 特に緑化・生長・花成と 温度・光の作用の研究, 生物環境制御
教 養 部 教 授	阪 倉 篤 義	6. 5. 23	京都府	文 学	日本語の歴史および説話・物語の研究
〃	上 田 泰 治	7. 1. 2	山口県	哲 学	科学哲学および近世哲学
〃	足 利 末 男	7. 1. 25	京都府	社 会 統 計 学	社会統計学の歴史と理論, 特にドイツ 社会統計学史の研究
化学研究所 教 授	竹 崎 嘉 真	6. 9. 28	大阪府	高 圧 化 学	気相反応の速度論的研究
〃	田 代 仁	6. 12. 19	東京都	窯 業 化 学	ガラス構造化学ならびに窯業化学の研 究
助 手	細 野 正 夫	6. 7. 13	岐阜県	繊 維 化 学	高分子の拡散と電気泳動, 高分子電解 質の溶液物性および複合体形成などの 研究
人文科学研究所 教 授	太 田 武 男	6. 9. 3	大阪府	日 本 文 化	民法, 特に家族法の理論的, 実証的, 比較立法的研究
〃	渡 部 徹	7. 3. 5	大阪府	日 本 社 会	日本社会運動史の研究
〃	飯 沼 二 郎	7. 3. 20	東京都	歴 史 地 理	日本農業の特質に関する歴史地理的研 究
原子エネルギー 研究所 教 授	西 朋 太	7. 3. 2	長崎県	原 子 燃 料	放射化学・核化学の研究

吉田寮熊野寮の現状と問題

吉田寮熊野寮の実態

(56.1.17現在)

学生部長 藤 原 元 始

はじめに

大学における学寮の管理運営をめぐって、本学を含め多くの大学で紛争が生じてから、すでに10年をこえる歳月が過ぎました。この間、本学の歴代学生部長、学生部委員及び職員は、学寮の正常な管理運営のため鋭意努力を重ねてきました。しかし残念なことに、とりわけ吉田寮（西寮を含む）熊野寮をめぐる問題は極めて深刻であります。あえてここに学寮の現状と問題点を率直に提示し、教職員各位及び学生諸君のご理解を得て、大学として学寮の正常化を自律的に達成したいと念願する次第です。

I 学寮の必要性

学寮の正常化への努力を廃寮化への動きとみる一部学生の短絡的な考え方に対し、まず学寮の意義を指摘したいと思います。

学寮のあり方については、今日では学生の意識も多様化しています。「快適な居住環境において、プライバシーが保障され、かつ修学の上においてもプラスとなる学寮を期待する者も多い」（昭和55年6月・国大協「学寮のあり方について」）という点も考慮しなければなりません。しかし、本学のように学生の出身地が広く全国にまたがるような大学においては、学寮が経済的条件に恵まれない学生の生活上、きわめて重要な役割を果たしてきた歴史を無視することができないのは当然のことです。

したがって、大学において学寮の果たすべき役割は大きいと言わなければなりません。ところが本学では入寮を経済的に必要とする学生が多いと思われるにもかかわらず、吉田寮熊野寮においては、利用者がきわめて少ないという不自然な事態を生じています。以下の資料は、吉田寮熊野寮の定員とその充足状況を示すものです。後述するような「京都大学新聞発表」による人数をそのまま加算したとしても、それらの充足率は驚くべき低さを示しています。両学寮の異常さを、きわめて明確に反映しているとみざるをえません。

寮 名 区 分	吉 田 寮 (西寮を 除く)	吉田寮西寮	熊 野 寮
定 員	147名	76名	422名
大学が確認している 在寮者数	44名	14名	76名
在 寮 者 数 定 員	29.9%	18.4%	18.0%
新聞発表者のうち 在寮確認に応じな かった者の数	20名	38名	70名

II 学寮の現状と問題点

次に、このような状況を招来したいきさつと問題について、順を追って説明したいと思います。

1 学寮の管理について

大学が学生の教育と生活のために設置した学寮は、法規上、学生部長の管理下におかれています。もともと本学には京都大学学生寄宿舎規程（昭和34年2月制定）があり、入寮者の決定は学生部長が行なうことになっています。従来は入寮希望者に対し学生部長の責任において「学生寄宿舎舎生募集要項」を作成し、前記京都大学学生寄宿舎規程に則って寮生代表の意見を尊重し、寄宿舎生の募集選考に当っておりました。

2 「自主管理」について

以上のような事情にもかかわらず、昭和43年の補充募集時に、吉田寮熊野寮の自治会は、いわゆる「自主管理」と称して、入寮希望者の募集、選考を実施しました。その後、独自に「京都大学吉田寮・熊野寮寮生募集要項」を作成し、これによる入寮希望者の募集、選考を寮自治会の名において実施してきています。この募集要項には、大学に納入すべき経費について一言も記載がありません。そして、寮自治会は選考した入寮者の氏名を、学生が発行している『京都大学新聞』に発表するに過ぎません。学生部としては今までやむを得ず、新聞に発表された入寮者氏名をたよりに、親元に対し入寮の確認を行なうなどの努力を重ねてきました。そして、入寮の回答を受けた者についてのみ寮生として、寄宿料債権の発生手続きを行なってまいりました。管理に係わる問題はそれにとどまらず、寮自治会は、寮に勤務する職

員の人事にまで容喙してきました。

いま一つ寮自治会の「自主管理」の実態について見落せない点があります。元来、寮生の私生活に要する水光熱費などは、その使用に応じて寮生自身が負担すべきものです。いわゆる負担区分の問題であり、それは社会通念上も当然のことです。けれども現実には寮生が負担しているのは、吉田寮では食事材料費、熊野寮では食事材料費と厨房の燃料費の一部（重油代）のみです。それ以外の経費は、炊事人の人件費等をも含めて大学が負担しており、吉田寮熊野寮関係の昭和54年度の支出は相当な高額に達します。

このような現状について、すでに昭和54年9月の時点で、会計検査院から次のような指摘を受けています。

「長期にわたり、寮生によって学寮を占拠状態にまかせておくことは、ひいては、国有財産及び物品の管理について責任を有する職員が、責任を的確に遂行していないことともなり、国有財産及び物品の管理に関する法令等に違背している結果となっているものと認められる。」

会計検査院の指摘の有無にかかわらず、上記のような学寮の現状を正常な状態として容認することはできません。

3 「確認書」について

寮自治会は、こうした「自主管理」を、大学当局とのいわゆる「大衆団交」において勝ちとった「確認書」に基づく正当な権利の行使だと強弁しています。しかし、学寮に関する確認書のなかには、今日の社会通念上容認できないだけでなく、法的にも実行のできないものが多いのであります。これら確認書の内容すべてを既得権益として主張することには、正当な根拠を認めることができません。学寮はこのような確認書に基づいて管理運営されるべきでないことは、すでに昭和53年学生部が寮自治会に通告したところです。

4 入寮者選考について

学生部長の行なう入寮希望者の選考について、「寮生代表の意見をきく」ことが、京都大学学生寄宿舎規程第4条に明記されています。このことは、学生部長が寮自治会の意見を無視して一方的に入寮者選考を行なうものではないことを示したものです。ここには、寮自治の伝統を大学が尊重し、寮生の自治に信頼を置いてきた歴史が示され

ています。なお、同規程第2条第1項は、「各寮における寮生活の運営は、寮生の責任ある自治によるものとする」と書かれています。しかしながら本学の場合、学寮への入寮に関する許可権は、規程上学生部長にあることは明らかなことであります。したがって、事務手続上、入退寮する者がその都度必ず学生部において必要書類の作成を要求されるのは言うまでもないことです。こうして、寄宿料債権の発生ないし消滅の手続きを完了することが、寮生自身の権利義務を明確にする上からも不可欠であります。しかし、現実には再三再四にわたる学生部の呼びかけにもかかわらず、これを無視し続ける者が多数いることは誠に遺憾です。

5 『京都大学新聞』による入寮者の発表について

ここで、新聞発表の問題点に触れておくことにします。

昭和46年来、入寮者の氏名と選考概評を寮自治会が、学生が発行する『京都大学新聞』に発表するというものでありましたが、そこにはいろいろな問題が生じています。

まず、入退寮者があっても発表時期を1年近く遅らせることもあり、その結果、学生部では在寮者の正確な把握ができないこと、また、寄宿料の債権発生と消滅について正規の手続きができていないことなどがあります。その上、記載の誤りや発表自体を行なわなかった年があったことなどを考慮すると、新聞発表を信頼するに足る資料として認めることはもはや不可能であります。

大学としては新聞記事のみでは、在寮者の正確な把握ができず、入退寮に係わる債権の発生あるいは消滅の正規の手続きができないのであります。

6 寄宿料等の未払いの現状について

吉田寮熊野寮の債権発生手続きが一応済んでいる寮生に限ってみても、昭和51年4月から昭和56年1月までの間に、寄宿料（月額吉田寮100円、熊野寮300円）の未納は、年額の195名分にも達しています。このまま放置しておくことは、本学の社会的信用を傷つけるばかりか、法的にも道義的にも許されないところであります。昭和53年6月から現在に至るまでの間、歳入徴収官及び学生

部は26回にわたって本人ならびに親元に対して納入を督促してきました。

未払いはこれだけではありません。吉田寮における炊飯のための燃料費も寮生が支払いを拒否している現状です。

これらの問題をめぐる関係教職員の公的・私的な負担の大きさと苦衷は、大変なものであります。金額の問題もさることながら、ことは学生としてのモラルの問題といわなければなりません。

Ⅲ 大学としての責務

以上が、本学の学寮に関する主な現状と問題点です。事態がこのままであるとすれば、学寮存在の意義がなくなるばかりか、教育の場としても放置できないことになります。ここに学寮を正常化する責務と緊急性を痛感する次第です。現状を放置すれば、学寮の管理責任を有する学生部長は、その責任を適正に遂行していないという理由で、国有財産及び物品の管理に関する法令に違背することにもなります。

学生部長が責任を痛感する点は、これのみに止まりません。吉田寮が老朽化し緊急の修復ないし改築を必要としていることは、周知のことです。もし万一、地震その他の天災に襲われるとすれば、倒壊する危険は甚だ大きいと言わざるを得ません。しかし残念ながら在寮者の氏名も正確に確認できず、寄宿料の納入も満足に行なわれていない現状では、文部省に予算措置を要求することはできず、改築計画を実行に移すすべはありません。こうした状態を放置すれば、災害による人命損傷という最悪の事態さえ招きかねないことを憂慮するものであります。

Ⅳ 正常化への努力

1 その経過

このような事態の経過の中で、歴代の学生部長は、学寮の管理運営の正常化のために鋭意努力してまいりました。しかし、こうした大学当局の努力を、寮生たちは故意に大学の「管理強化」とか「廃寮化」への動きだとして宣伝してきました。そして、いわゆる「大衆団交」を要求して大学して学生部に押しかけ、長時間にわたり職員を詰問し、見解を強要し、あるいはまた、暴力的行為に

およぶといったことがしばしば繰り返されてきたのです。

ことに、前学生部長の在任中に、学寮の当面する諸問題につき、寮生に対する学生部長の「説明会」を開催すべく予備折衝を寮生代表に提案し努力していたところ、昭和54年12月15日、寮生が多数厚生課に押しかけ、学生部長ならびに職員に対して暴力的行為におよんだことは記憶に新しいところです（本広報 No. 189参照）。こうした最悪の事態を打開するため前学生部長は、昭和55年1月10日付けをもって「学寮における当面の諸問題に関する学生部の基本的な方針について」と題する文書を寮生あてに送付しました（本広報 No. 190参照）。この文書のなかで、いわゆる大衆団交は行なわないこと、学生部長と寮生との話し合いは一定のルールに従って行なわれなければならないこと、そしてとくに、寮の管理運営を正常化するためには、少なくとも5項目の基本条件が満たされなければならないことが明確に述べられています。すなわち、①在寮者の確認、②寄宿料の納入、③国有財産及び物品の管理の適正化、④炊事人の人件費の負担区分の適正化、⑤老朽寮の改築等の措置であります。

現学生部長はこの基本方針を踏襲し、寮の管理運営の正常化の第一歩として、在寮者の確認と寄宿料の納入を寮自治会及び寮生に強く要求してきました。昭和55年1月以来、前後5回にわたり、吉田・熊野両学寮の自治会に対し正確な在寮者名簿の提出を求めてきましたが、これに対し何らの回答も得られませんでした。そこで『京都大学新聞』に発表された入寮者氏名を手掛かりに在寮していると思われる個々の学生とその親元宛に、入寮の事実の有無の問い合せをし、入寮している場合には所定の用紙に必要事項を記入して、必ず昭和55年11月12日までに学生部に提出することを要求しました。しかし、何らかの返答があったのは全照会者のほんの一部にすぎませんでした。しかも、その間にも寮自治会は学生部長の基本方針を「管理強化」、「廃寮化」と曲解して、「在寮確認断固拒否」を宣言したばかりか、大衆団交を要求して学生部に押しかけ、職員に罵詈雑言を浴びせるといった行動に出るのみで、今なお自ら襟をただすところが見られません。

2 今後とるべき措置について

吉田寮熊野寮の現状をこれ以上放置することはできません。

廃寮化反対を叫ぶ寮生自身は、こうした事態を続ける限り却って自らそのような結果に責任を負うものであることを自覚すべきであります。

学生部長としては学寮の存続そのものが困難と

なる事態を招かぬよう、学寮正常化の実をあげなければならないと信じます。学寮の現状を改善するための努力を重ねてきましたが、今や必要な措置を講ぜざるをえない事態にたち至ったと考えます。ここに本学の皆さんに学寮の実態と学生部の真意を訴え、学寮の正常化への努力にご理解をお願いいたします。

<部局の動き>

結核胸部疾患研究所学術講演会

結核胸部疾患研究所では、1月24日(土)京大会館において、午後1時30分から5時30分まで、下記のとおり昭和55年度学術講演会を開催した。

酵素固定化を応用した機能性

医用材料の開発

渡部 智

好酸球の分化・増殖因子について

堀内正宏

線維芽細胞における性ステロイド

レセプター分化とコラーゲン

代謝応答

細川昌則

呼吸器疾患の心身医学

河野博臣

火災事故被災者の肺機能障害について

加藤幹夫

びまん性細気管支炎における

免疫動態の検討

平田健雄

Natural Killer-Interferon 系:

腫瘍監視機構における役割

湊 長博

特別講演

開発途上国における結核問題と

日本の役割

島尾忠男(結核予防会結核研究所長)

(結核胸部疾患研究所)

防災研究所研究発表講演会

防災研究所では、2月3日(火)と4日(水)の両日にわたり、3つの会場を使って昭和55年度研究発表講演会を開催した。

本年度は特別講演に引続き、第1会場(火山・地震・地盤災害関係)、第2会場(建造物・気象災害関係)、第3会場(海岸・河川災害関係)にわかれて116題の研究発表が行なわれた。

なお、特別講演は下記のとおりであった。

建築構造物の確率論的地震応答

解析について

南井良一郎

セント・ヘレンズ火山の噴火に

伴う災害現象の調査

高橋 保

1980年10月10日のアルジェリア

における地震動災害

土岐憲三

(防災研究所)

日 誌

(1981年1月1日～1月31日)

1月5日 新年名刺交換会

10日～11日

共通第1次学力試験

14日 安全委員会

〃 中華人民共和国農業機械高等教育考察団団長(吉林工業大学校長)陸 錦氏外5名来学、総長および関係教官と懇談ならびに学内施設見学(17日まで)

17日～18日

共通第1次学力試験追試験

19日 インドネシア国 Indonesia 大学長 Mahar Mardjono 氏来学、総長および関係教官と懇談ならびに学内施設見学(21日まで)

21日 国際交流委員会

22日 総長、大学院生協議会と会見

23日 防火委員会

24日 結核胸部疾患研究所学術講演会

26日 組換えDNA実験安全委員会

27日 評議会

28日 学位授与式

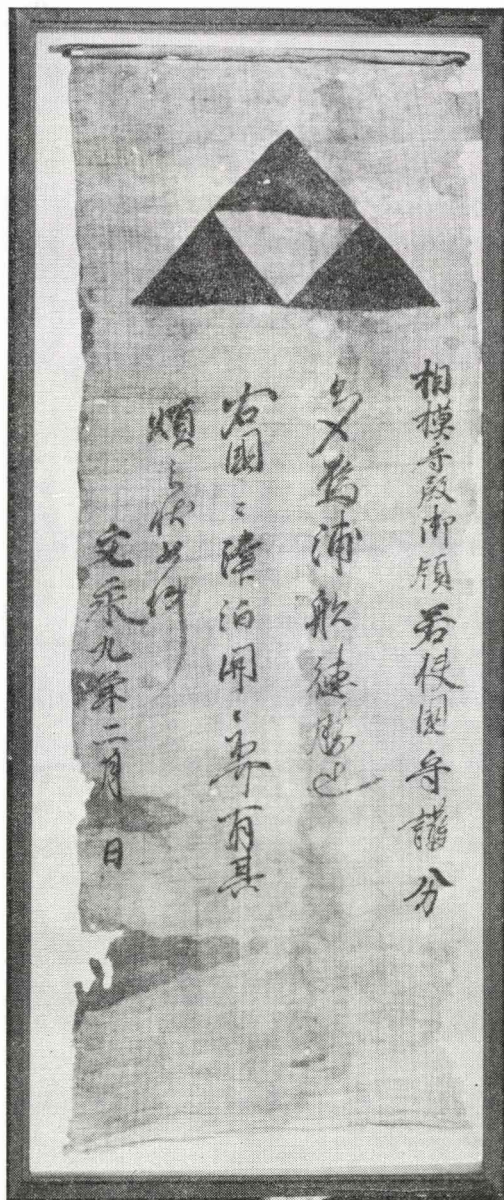
<紹介>

文学部陳列館 その2 (国史学)

文学部陳列館に収蔵されている国史学関係の史料は、古文書・古記録の原本だけでもすでに5万点以上に達し、学界に著聞されるものも多いが、ほかに影写(原文書の下から光をあてて、その上に重ねた和紙にその原文書の文字を形どおり写しとったもの)・謄写、あるいは写真によって蒐集されたものも多く、また絵画・地図・器物や民俗資料をも加えると、膨大な数量にのぼる。陳列館の二階には、それらを展示するために2つの陳列室が設けられているほか、大部分は旧書庫および別棟の倉庫に収納・保存されており、またそれらの閲覧のためには古文書室とよぶ一室を置き、大学院学生・学部学生だけでなく、学外研究者の利用にもできるだけ応じるようにしている。これだけの質・量ともにすぐれた貴重な史料、とくに古文書・古記録の原本を、大学学部に属する一研究室が保管している例は他になく、他大学に誇りうる存在であり、もちろん学生に対する古文書学の演習はこれら原本文書によって行なうのを伝統としている。

ところでこうした膨大な史料は、明治40年の文科大学史学科開設以来、今日まで70余年の間、研究・教育のための基本史料の蒐集を最も重視するという方針のもとに、歴代関係者が営々として努力し来ったその結晶であるが、とくに創設時の国史学第二講座担任三浦周行教授は、史料編纂官であった経験に基づき、京都という地の利を生かしながら、諸家・社寺などの文書・記録を採訪・調査し、あるいは巷間に散逸していた資料を乏しい大学の予算の中から購入費を捻出して、その蒐集に非常な努力を傾倒した。三浦教授は昭和6年まで在任したが、収蔵史料の基礎はほぼその間に固まったといえる。しかしその後も史料の蒐集はたゆみなく続けられ、戦後においても、小葉田 淳・赤松俊秀両教授の在任中に、その尽力によって若狭国田烏浦の鎌倉期漁村史料として貴重な秦文書約240点と過所船旗、有名な東寺百合文書と一体をなす教王護国寺文書354巻約3,000点、藤原氏の分流勸修寺家旧蔵の全文書・記録約3,500点が収蔵されたことは、特記すべきことである。そ

のうち教王護国寺文書は全部が、勸修寺家文書のなかでは勸修寺為房の自筆日記『大御記』6巻、同為隆の自筆日記『永昌記』6巻がすでに国の重要文化財に指定され、また秦文書も目下その候補にのぼっている。なお教王護国寺文書は『教王護国寺文書』10巻・別巻(絵図)として、秦文書は『若狭漁村史料』として公刊されている。

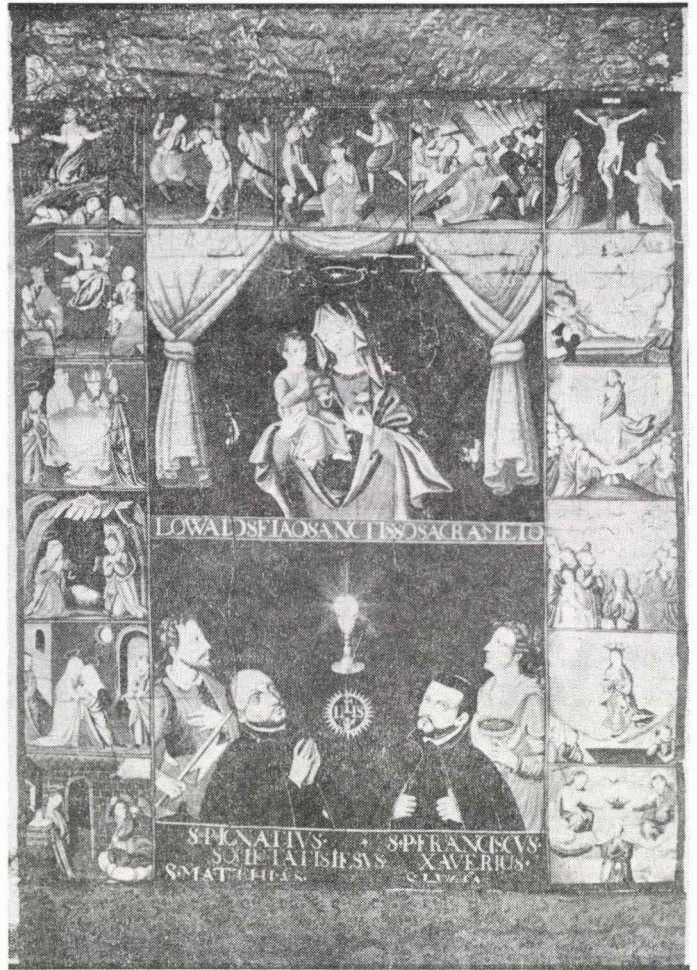


『秦文書』過所船旗(文永9年2月 日)

(通関の特権を示す旗、上部の図形は北条得宗家を示す。麻布製。)

蒐集史料は奈良・平安から近代までの各時期にわたっているが、当初はとくに中世文書に蒐集の力点が置かれたようである。しかし内容は極めて豊富で、各種各様式のものを含み、公家・武家・文人の有名人の筆蹟も多い。収蔵品の一部は早く『京都帝国大学国史研究室 蔵史料集』として刊行されたが、収納にあたっては、原則として所蔵者別に分類されている。寺院関係では前記教王護国寺のほか、東大寺・同法華堂、興福寺門跡一乗院、近江葛川明王院、山城地藏院など、神社では春日神宮大東家、松尾月読社、伊勢神宮御師来田家などの文書が主要なものであり、公家では前記勸修寺家のほか、中院家・壬生家・平松家などのものがあり、武家では駿河伊達氏・和泉淡輪氏・常陸畑田氏などの文書が著名で、そのほか初代の文科大学長であった狩野亨吉氏蒐集文書も多く、の貴重史料を含んでいる。近世の文書・記録としては水戸徳川家の『大日本史編纂記録』のほか、大洲・福山・臼杵・府内・宮津などの諸藩記録、琉球関係史料などもあり、さらに近代史料では明治初期の外交官吉田清成の旧蔵文書約3,500点が学界の注目するところとなっている。

文書・記録以外では、キリシタン関係資料としてのマリヤ十五玄義図は著名であり、大友宗麟ローマ字紋章入り鞍、中院家古今伝授笈、下鴨神社



『マリヤ十五玄義図』

(泥絵具による初期和風洋画。信者にマリヤの生涯を絵解したものの。)

斎王御帳台など注目すべきものも多い。

(文学部)